

土屋由香

Yuka Tsuchiya (Ehime University)

[研究ノート] マグロと水爆

——高知県・愛媛県南部における元漁業者への
聞き取り調査を通じた「グローバル冷戦史」の試み——

1. 冷戦史におけるグローバルとローカルの結節点としてのマグロ漁

ノルウェー出身の歴史学者アルン・ウェスタッドの『グローバル冷戦史』(*The Global Cold War: Third World Interventions and the Making of Our Times*, Cambridge University Press, 2005)が刊行されてから、すでに10年近くが経過した。中東やアフリカ、アジアの脱植民地国家を冷戦の重要なアクターとして捉え、米ソ対立を中心とする冷戦のメタナラティブを「脱中心化」する試みは、冷戦史研究のパラダイムシフトを印象付けた。それから現在までに、第三世界の国々やソ連以外の社会主義国に焦点を当てたり、「ローカル」や「トランスナショナル」な視点を加えたりした新しい冷戦研究が続々と現れた。しかし、「グローバル冷戦」とローカルな人々の生活との結節点に正面から切り込んだ研究は、けっして多いとは言えない。

冷戦の荒海を文字通り航海していた人たちが居る。1950年代後半～1960年代に全盛を極めたマグロ遠洋漁業の漁師たちである。中学校を卒業して数年間、父親や先輩漁師たちに付いて近海で船酔いを克服し、17～18歳でマグロ延縄船に乗る。いちど船出すると1年半～2年も故郷には戻らない。こうした漁師たちの多くが、

現金収入の乏しい僻地の漁村出身者たちであった。筆者の住む愛媛県の南部から高知県にかけても、村ぐるみで募集された若者たちがマグロ船に乗った。中卒で月10万円を故郷に送金できて、しかも船の上では少なくとも食べ物には困らない。貧しい漁村の家族にとっては、魅力的な選択肢であった。

「金が欲しけりゃマグロ船に乗れ。命欲しけりゃ、マグロ船に乗るな」「船底一枚下は地獄」と言われた危険な航海にいどんだ彼らの敵は、シケだけではなかった。1954年3月1日、静岡県焼津船籍のマグロ漁船、第五福竜丸がマーシャル諸島のビキニ環礁で行われた水爆実験（ブラボー作戦）で撒き上げられた放射性降下物（死の灰）によって被ばくした。同時に多くのマーシャル諸島住民も被ばくしたが、世間が注目したのは第五福竜丸であった。漁師たちが焼津港に戻って病院に収容されると、日本中で「原子マグロ」をめぐるパニックが起り、太平洋の漁場で獲れた大量の魚が廃棄されて日本の水産業は大打撃を受けた。半年後、第五福竜丸の通信士であった久保山愛吉氏が急性放射線障害で死亡した。東京都杉区の主婦たちから沸き起り、法政大学教授の安井郁がリーダーシップを取って推進した原水爆禁止署名運動は翌年8月までに32万人以上の署名を集めた。しかし日米政府の間では200万ドルの見舞金で政治決着が図られ、以後、補償を求める交渉は打ち切られた。

ところが、太平洋上の水爆実験は、部分的核実験禁止条約が結ばれる1963年の直前まで続けられ、アメリカによる実験だけで105回にも及んでいた。その間も多くのマグロ漁船が実験水域の近くで操業あるいは航行していた。（むろんマグロ漁船以外にタンカーや貨物船なども付近を航行していた。）彼らは太平洋を含む世界の海を、マグロを追いかけて航海した。サモア島に設立されていたニチレイの基地をはじめ、ブラジルのリオデジャネイロやレシフェ、パナマのクリストバル、トリニダード・トバコ、カナリア諸島、コートジボアール、南アフリカのケープタウン、ベルギーのブリュッセル、そしてキューバなど、世界中のマグロ集積基地に積荷を卸しながら操業を繰り返し、最後に捕れたマグロを積んで日本に帰るのである。水爆実験の危険水域近くで操業していた船は、程度の差はあれほぼ間違いなく被ばくしていたと考えられるし、はるか離れた場所であっても、放射能を帯びた雨が降り注いでいた。しかし、どの船に乗っていた誰が、どれだけの被ばくをしたかを特定するのは不可

能に近い。ただ一つ明らかなのは、多くのマグロ漁師たちが50代や60代で癌や心臓病で亡くなったという事実である。家族たちは、水爆実験による被ばくによるものではないかと疑いつつも、声をあげられなかった。騒げばマグロが売れなくなり、明日の生活が脅かされる。こうして、高度経済成長を迎えつつある日本社会の周縁で、漁師たちは黙々とマグロを捕り続けたのである。

マグロ漁師たちの経験は、国際政治が人々の日常生活の上に直接降りかかった例であったといえよう。核をめぐるグローバル冷戦とローカル事情がもつとも激烈な形で交錯したのが、水爆実験による船乗りたちの被ばくだったかも知れない。この研究ノートは、愛媛大学法文学部・グローバル・スタディーズ・コースの学生有志と筆者が高知県と愛媛県で行っているマグロ漁師への聞き取り調査を中心に、ローカルな産業遺産としてのマグロ漁とグローバルな冷戦との関係をつなぐ「グローバル冷戦史」への試論である【★1】。筆者にとっては多分に実験的要素を含む萌芽研究である為、学部教育と研究との連動、フィールドワークと公文書を用いた実証研究との連動、地域産業史と国際政治史との連動など、今後さらに検討すべき課題が多々含まれている。フィールドワークや地域史の専門家から見れば稚拙さが目立ち、実証研究や国際政治の専門家の眼には正統性に欠けるかも知れないが、今後、各方面からの御助言をいただきながら改善して行きたいと思う。

2. ドキュメンタリー映画『放射線を浴びたX年後』

01
02
03
04
05
まず、この研究の直接的なきっかけとなったドキュメンタリー映画『放射線を浴びたX年後』について紹介したい。2012年、愛媛県松山市のローカルTV局・南海放送が、第五福竜丸以後のマグロ漁船の被ばくを扱ったドキュメンタリー映画『放射線を浴びたX年後』（伊東英朗監督作品）を製作した。「第50回ギャラクシー賞報道活動部門・大賞」をはじめとする数々の賞を受賞した本作品は、奈良女子大学においても2014年6月22日、小路田泰直副学長率いる研究チームによって上映会

が開催され、併せて伊東監督による講演会とシンポジウムが行われた。

映画は、元高校教師の山下正寿氏が、仲間の教師や教え子たちと共に 1985 年から行ってきた元船員への聞き取り調査の延長として、被ばくしたマグロ漁船乗組員の消息を訪ね歩くという形で進行する。山下氏の調査で消息の分かった乗組員は 241 人。生存していれば 50 代から 60 代の時期に、3 分の 1 が既に死亡していた。被ばくした魚を水揚げした船は、東北から九州まで 全国に渡っていたが、その 3 分の 1 が高知船籍であった。伊東監督は 2004 年に山下氏の活動を知り、第五福竜丸以外にも大量の船が被ばくしていたという事実「まるで狐につままれたような感覚」にとらわれたという。それ以来、松山市から高知県東部までの 300 キロを何十回となく往復して、被ばく者を訪ね歩いた。ローカル局だからこそ出来る、一人一人の人間の「痛みを忠実に丁寧に描く」作業によってできたドキュメンタリー番組は、日本テレビ系「NNNドキュメント」で全国放送され、さらに『放射線を浴びたX年後』として映画化された [★2]。

映画が焦点を当てた生存者の一人、有藤照雄氏は、1954 年、27 歳でマーシャル諸島へ航海に出た。第五福竜丸が被ばくした「ブラボー」実験の時には現場に向かって航行中であったが、2 回目の「ロメオ」実験の放射性降下物が、彼の乗っていた第二幸成丸に降り注いだ。操業を終えて帰港し、放射線測定を行ったところ、ビン玉から 4000 カウント、船体から 800 カウントの放射線が検出された。当時の厚生省の基準値は 150 カウントで、それ以上のマグロは廃棄されていた。1954 年の一連の実験により被ばくした魚を廃棄した船は、のべ 900 隻以上にのぼり、放射線測定の結果として「カツオの幽門垂 2 万 4000 カウント」「カツオの肝臓 4 万カウント」などの記録が残されている。有藤氏のほかにも、映画では「水爆実験を見たって自慢していた」兄と姉婿が続けて癌で亡くなったと証言する女性や、「10 人ぐらいこの村から父が連れていったが、みんな若くして亡くなった。」と語る元漁労長の弟、「生きている人は、私と同じようにきちっと合羽を着ていた。」と肌の露出度合が生死を分けたことを示唆する元甲板員など、水爆実験を過去の歴史としてしか知らなかった者が「めまい」を覚えるような生々しい証言が、次々とたたみかけるように視聴者に迫る [★3]。

当時ほとんどの船員が被ばくについて口をつぐんでいた中、岡本清美さんはマグロ船を降りた後、亡くなる直前まで、山下氏らと一緒に発足させた「被災船員の会」の代表世話人を務めていた。「国が相手だから、これは成功しないだろう」と半ば諦めながらも被災者の健康調査をして議会に訴え続けたが、会員の相次ぐ死亡で会は解散を余儀なくされた。山下氏は「船員の死を無駄にたくない」との思いから、今も「被ばく者手帳」の交付を国に求める活動を続けている。

映画はまた、アメリカ・エネルギー省の公文書に基づいて1954年3月1日の「ブラボー」実験による放射性降下物がアメリカ本土にも達していたことや、同じシリーズ5回目の「ヤンキー」実験の後には、日本にも放射性降下物が降り注いでいたことを説明している。

筆者はこの映画が2013年11月に愛媛大学の近くの「シアターねこ」で上映された際に、グローバル・スタディーズ・コースの学生らとともに鑑賞した。筆者の専門は冷戦期アメリカの広報文化外交であり、ここ6年ほどは、1950年代の「原子力平和利用」が、広報文化外交のツールとして用いられたことに着目してきた。そのような関係で、ゼミでも核・原子力と外交との関わりに焦点を当てることが多く、『放射線を浴びたX年後』は教材としても適切だと考えたのである。

伊藤監督がはじめて山下氏の活動を知った際に「狐につままれたような」感覚にとらわれたのと同じように、学生たちと筆者も「第五福竜丸」以外の船がこれほど多数被ばくしていたこと、また地元愛媛県や高知県の漁師たちがそれらの船に乗っていたこと、何よりも自分たちがこれらの事実を全く知らなかったことにショックを受けた。ちょうどこの日は、上映後に伊東監督との懇談会が設けられており、学生たちは熱心に質問をしたり展示されている資料に見入ったりしていた。伊東監督は、自分が聞き取りをしたマグロ漁師はほんの一部でしかなく、学生たちがこのプロジェクトを引き継いでくれることを望んでいると述べられ、学生たちはすっかりモチベートされた。

こうして、それぞれ忙しい授業や課外活動やアルバイトや会議の合間をぬって、高知県宿毛市や愛媛県愛南町の小さな漁村での聞き取り調査が開始された。学生たちは、大学からの補助金制度「プロジェクトE」（学生による調査・研究プロジェクト）

01

02

03

04

05

に応募して補助金を得た。微々たる金額ではあるが、これで大学のマイクロバスを数回借り上げることができる。愛媛大学のある松山市から聞き取り調査の場所までは、車で片道3時間以上かかるのだ。

3. 冷戦・ローカル産業・高度経済成長

マグロ漁師たちの語る内容はとても豊かで、「被ばく」の問題だけに焦点を絞った聞き取り調査では「木を見て森を見ず」という状態に陥る可能性があるように感じられる。第一に、彼らの話は国際政治と普通の人々との関係をあぶり出し、冷戦史に新たなページを書き加える可能性を秘めている。第二に、ローカルな産業史という視点からも、70～80歳代のマグロ漁師たちの経験をオーラル・ヒストリーとして記録することには大きな意義が見出される。そして第三に、マグロ漁師たちの経験は、日本の近代化や高度経済成長の歴史を「脱中心化」し、その書き替えさえ迫っているように思われる。

第一の点について特に重要なのは、マグロ遠洋漁業の最盛期と、洋上水爆実験の最盛期と、アメリカの家庭における缶詰の消費拡大期は、いずれも1950年代半ば～1960年代にかけての冷戦初期に重なっているということである。第二次世界大戦後の占領期、日本の漁業は「マッカーサーライン」と呼ばれる漁業制限区域に封じ込められ漁獲量も低迷していたが、1952年のサンフランシスコ講和条約発効により日本が主権を回復しマッカーサーラインも撤廃されると、カツオ・マグロ漁は「沿岸から沖合へ、沖合から遠洋へと漁場拡大の方向」に向かって行った。漁獲量は年々増えて、1958年には18万4000トンとなった。当初は、より近海に回遊するカツオ漁との兼業船が多かったが、アメリカで缶詰用マグロの需要が増大すると、マグロ専業船への転換が進んだ【★4】。例えば高知県室戸市ではかつて捕鯨が盛んであったが、次にカツオの一本釣りが盛んになり、「このカツオ船がマグロ船に姿を変えていったのが1955年ごろ」だった。マグロ遠洋漁業は命の危険を伴い、ハイリスク・

ハイリターンな仕事であったが、高知県や愛媛県南部の若者たちは「大金を掴もうと、中学を出るところでマグロ漁船に乗り込んだ」という [★5]。

マグロ漁師たちは水爆実験を尻目に見ながら航海し、獲れたマグロの多くは缶詰に加工されて、アメリカ人の食糧保存庫に取まった。核実験を行っていた当事国のアメリカでは、核戦争が本当に起こるかもしれないという不安が社会に蔓延していた。1950年に設立された「民間防衛局」(FCDA) (1958年には Office of Civil and Defense Mobilization に改編) は、核戦争に備えた避難訓練や食料の備蓄、そして家庭の裏庭に核シェルターの設置を推奨した。今日でいうところの「防災グッズ」が飛ぶように売れ、映画やコミックなどのポピュラー・カルチャーにも「核」のテーマがあふれた [★6]。核シェルターで家族がしばらく生活できるだけの食糧を備蓄するには、缶詰・瓶詰食品が不可欠であった。かくしてマグロ漁師たちが被ばくしながら捕ったマグロ (その多くも恐らくは被ばくしていた) は、核を恐れるアメリカ市民の食糧保存庫に取まったのである。

日本の漁師が捕ったマグロが被ばくしていたことに、アメリカ政府は気付いていた。それを示す証拠として、例えば1954年7月6日、アメリカ食品医薬品局のクリベット氏 (Mr. Cribbett) から国務省宛に、以下のような口頭報告が行われている。

本日、カリフォルニア州の缶詰工場で、放射能汚染されたマグロが見つかった。これは缶詰工場が独自に行っている検査の結果見つかったものである。3月の水爆実験以来、日本からアメリカに輸出されたマグロの中から放射能汚染が検出されたのは、これで3例目である。このマグロは35ポンドのビンナガマグロで、横浜から浅間丸で届けられたものである。(中略) 汚染は、前の2例と同じく主に頭蓋骨と骨から見つかったので、経口摂取によるものと考えられる。放射能は0.5～0.8ミリレントゲンであった。 [★7]

これを聞いた国務省は、今後もこの問題に注意を払って行くものの、今のところ東京のアメリカ大使館には伝えないでおこうという判断を下した。このように、日本のマグロ漁船が捕ったマグロの少なくとも一部は被ばくした状態で出荷され、ア

01

02

03

04

05

メロカ人の食卓にも上っていたと考えられる。マグロと水爆と缶詰の相互関連性は、冷戦初期の国際政治が人々の暮らしや健康に直接的な影響を与えていたことを浮き彫りにしている。

マグロ漁師たちはまた、社会主義国にマグロを取めることもあった。マグロの売りに冷戦イデオロギーは関係がなかった。しかしながら、あるマグロ漁船はキューバにマグロを取めて帰る途中、パナマ運河で米軍から嫌がらせを受けて2日間足止めをされたという。こうしたエピソードからも、冷戦という大国の論理と漁民の生活とが、地球上いたる所でぶつかり合っていたことが見て取れる。国家や東西の「ブロック」が国際社会の重要事であった冷戦期に、マグロ漁師たちはそうした境界線を軽々と「越境」しながら生きていたことがわかる。

第二点目の、ローカルな産業遺産としてのマグロ漁についても補足しておきたい。ひとたび海に出れば常に死と隣り合わせのマグロ漁師たちの間には、独自の文化が構築されて行った。気前の良さや潔さ、面倒見の良さ、豪放さ、そしてポヘミアン的な無国籍さと郷土愛との共存。また10代後半の若者たちを1年以上も厳しい労働と共同生活に従事させるためには、船上の生活にはある程度の陽気さや自由さとともに、厳しい規律や目上の者への服従も求められる。聞き取り調査の途中、年離れたマグロ漁師の言葉の端々から、船長や漁労長などへの敬意が今でもにじみ出ることがあった。

また漁師たちが故郷に帰る時には、現金だけではなくさまざまな外国の事物が漁村にもたらされる。カジキマグロの長い鼻に彫刻を施した飾り物、サメの歯、ワニの剥製、生きたオオム、洋酒や高級時計……。小さな漁村は、とても「グローバル化」した場所である。さらに、留守を守る女性たちの間にも、助け合いのネットワークが築かれる。夫や息子が航海に出ている間、女性たちは小さい子どもたちや舅・姑の世話から力仕事まで、すべてこなさなくてはならない。あるマグロ漁師は、妻の居ない所で私たちに、「漁師の女房はええのお。給料はちゃんと入ってくるし、亭主は海の上で毎日顔突き合わせんでいいし。わしら女に生まれたかった。」と話した。当の妻は台所で筆者と二人きりになった時、「舅・姑と子ども2人の世話を、ぜんぶ自分でせにゃならん。大変だったよ。」と語った。女どうしの互助関係がなければ、

とても厳しい生活を切り抜けられなかったであろう。こうした独自の文化を記録しておくことは、恐らく時間的に今が限界だと考えられる。

そして第三の点として、ローカルなマグロ漁の文化は、1950年代、朝鮮戦争特需を起爆剤として高度経済成長へと突き進む日本の「周縁」地域で何が起きていたのかという、日本の近代化そのものの在り方を問う問題にも結びついている。大雑把な言い方をすれば、愛媛や高知の南部は移民送り出し地域であり、出稼ぎ労働供給地域であり、マグロ漁船乗組員の出身地であり、そしてその一部は原発誘致地域でもある。すなわち現金収入に乏しく、近くに大きな市場が無く、他地域や外国からの送金、そして後には政府からの補助金に頼ることが生きる手段となったのである。このことは、日本の近代化と経済発展とが、周縁地域にいかなる犠牲を強いて成り立っていたのか、また周縁地域に住む人々がいかにかくましく活路を求めてきたかを浮き彫りにしている。被ばく体験だけではなく包括的・複眼的に漁師たちの話を聞くことの重要性は、このように国際政治・地域文化・近代化など重層的なテーマがそこにたまたみ込まれている所にある。

4. 高知県宿毛市での聞き取り調査

聞き取り調査を行ったN地区は、3つの小さな村落からなる。その一つに住むT氏（74歳）は、中学校を出て翌年16歳でマグロ漁船に乗船を始めた。共和丸を最初として、10代～20代に間に室戸船籍などの6隻のマグロ漁船で航海した。Tさんは船上の生活の厳しさを語ってくれた。「普通の石鹸ではなく、モノゲン、ワンダフルなどでないと、海水は泡立たないので、それで身体を洗って、洗髪はスコールが来るのを待った。」「兄も1度だけ一緒に乗ったが、だいたい一人。」「今の若い者には考えられんだろう。仕事を選ぶことなんか、できなかった。漁師の子は漁師。中学校出て、2年半も家に帰れん。」「自分は飯炊き係で4升×1日4回炊いた。一度、イモを入れて炊いて、そのイモを食べたらひどく怒られた。」最終的にはこのような船

01

02

03

04

05

上生活が辛くて、船を降りたという。

三重船籍の第八昇栄丸に乗っていた時、水爆実験に遭遇した。100トンほどの船で、乗組員は18～19人だった。2年ぐらい操業して、ニチレイ・サモア基地にびんちょうマグロの荷を下ろして日本へ帰る途中だったという。ニチレイの前身は、1942年に製水業・水産業各社を統合して誕生した国策会社「帝国水産統制株式会社」であった。戦後、水産統制令の廃止を受けて「日本冷蔵株式会社」となったが、この時、冷凍部門を継承するかわりに、直接漁労を「泣く泣く諦めざるを得なかった」ことが、いち早くマグロの「一船買い」と缶詰原料としてのアメリカ輸出に先鞭をつける結果につながった。日本の水産業には、戦前から缶詰・冷凍水産物の対欧米輸出の実績があったので、海外に市場を求めることは自然な成り行きであった。ニチレイはアメリカ・ロサンゼルス缶詰メーカー、バンキャンプ・シーフード社とマグロ供給契約を結び、1955年5月に冷蔵船「サイパン丸」をアメリカ領サモア島に係留し、「中小マグロ漁業者の水揚げを集荷して凍結加工する」事業に着手したのである。以後、こうした「基地漁業」が中小マグロ業者に海外進出の機会を提供し、日本の遠洋漁業を支えて行くが、こうした工夫はまた、ビキニ環礁事件による魚価の急落に対抗し巻き返すための方策でもあった[★8]。

T氏は、サモア島を出発する時に、「ハワイから観測するために原爆実験が行われるが、影響はないので大丈夫。ただ、双眼鏡では見ないように。」という警告を通信局長を通して伝えられていた。双眼鏡等で見ると失明の可能性があるという警告であったが、「危険だ」とか「近づくな」とかいうものではなかった。サモアを出発して3日後、実際に水爆実験を目撃したときの状況についてT氏は、「海が虹色になった。水平線から水平線まで半円を描いて海が盛り上がっていた。それから霧雨が降った。」と証言した。また「音は聞こえなかったし、灰も見なかった。霧雨が降った時には、帽子を着用して船外で作業を継続した」とのことである。「マグロは捨てなかったのですか?」「身体検査は無かったですか?」というこちらからの質問に対して、「マグロも捨てなかったし、身体検査も何もなかった」と答えた。

T氏は帰国して地元の高校の先生に、「原爆を見た」と話してみたら、「うそつけ。おまえ、生きちよるが」と言われて信じてもらえなかった。原爆を間近で見た人が、

元気に帰ってくるはずがないというのである。先生に信じてもらえず傷ついたT氏は、「以後あまり人には言わなかった。他の仲間たちも、あまり人には話していない。」ただ同じころ、別のマグロ漁船、菊水丸も近くを航行していて、船員どうして「お前らも見たか？」と話題になったという。

「お身体の調子はどうですか？」との質問に対してT氏は、「自分より上の、福竜丸世代の人たちは皆、早くに亡くなったが、自分も、また一緒に原爆を見た他の仲間も、とくに調子が悪くなったり病気になることはなかった」という。ただ、「心臓にはペースメーカーを入れている」し、「最近、脳梗塞をやったので、床に座れなくなった」と語った。

水爆を目撃したのがこの水域であったのかを特定しようと世界地図を広げた私たちにT氏は、「ジョンストン島とか言ってたなあ」と言った。アメリカ領ジョンストン環礁は、ハワイの南西約1300kmに位置する離島で、かつてはアメリカ軍の化学兵器貯蔵庫・廃棄場として使用されていた。1958年～1975年の間、ジョンストン環礁は地上および地下核実験場として使用された。1958年に実施された「ハードタックI作戦」では、「ティーク」と「オレンジ」の2回の高高度核爆発実験（弾道弾迎撃ミサイルのテスト）がジョンストン島からのミサイル打ち上げによって行われた。1962年には「ドミニク作戦」の一部として14回もの核実験がジョンストン島で行われた。このうち5回が飛行機からの空中投下、残りはミサイルでの打ち上げによる核爆発実験であった。ミサイル打ち上げ実験のうち何回かは失敗し、地上や地上近くで手動爆破したことにより、島がプルトニウムで放射能汚染された〔★9〕。

T氏が目撃した実験がこのうちいずれかであったのか、特定するのは難しい。「海が虹色になった。水平線から水平線まで半円を描いて海が盛り上がっていた。それから霧雨が降った。」という証言は、成層圏やその近くで爆発を起こす高高度核実験では考えにくい。高高度での爆発は、地上からは「真っ赤な縁取りのされた緑や青の丸い光」や「オーロラ」のように見えるらしい。するとT氏が見たのは、1962年の「ドミニク作戦」のうち5回の空中投下実験のいずれかだったのだろうか。T氏は実験を目撃した年を「昭和39年」（1964年）と記憶していたが、この年にはすでに部分的核実験禁止条約が発効して大気圏核実験は行われていなかったため、「昭和37年」

01

02

03

04

05

(1962年)の思い違いかもしれない。

しかしながら、1958年の「ハードタック I 作戦」であったという可能性も否定はできない。2014年現在74歳のT氏は16歳で(1956年ごろ)乗船を始め、第八昇栄丸は二番目に乗った船だったという。T氏の記憶している通り第八昇栄丸に乗っている時に水爆実験に遭遇したとすれば、1958年であった可能性が出てくる。

「大丈夫だが、双眼鏡では見ないように」という警告があったという証言は、高高度核実験であったことを示唆している。それを裏付けるのは、筆者が今年、米国立公文書館で入手した以下のような資料である。アメリカ原子力委員会のストローズ議長の関係資料の中に、ジョンストン島の水爆実験に関するものがあつた。「機密」(Secret)という大きな赤いスタンプが押され、後に機密解除されたファイルの中に、「ハードタック I 作戦」の危険水域設定について、原子力委員会から議会の両院原子力委員会に宛てたメモランダムが取められていた。これによると当初、「ハードタック I 作戦」の危険水域はビキニ環礁とエントウィク環礁に設けられていたが、2度の高高度核実験を行うにあたって、安全確保のためにジョンストン島に場所を移す必要が生じたという。高高度核実験はミサイルで核弾頭を打ち上げるため、万一事故が起きても近隣住民に影響の少ないジョンストン島のような離島が選ばれたのであろう。実際にミサイルの不具合によりプルトニウム汚染が起きたことは、前述の通りである。ともかく、ジョンストン島を中心とする危険水域が新たに設定され、1958年7月26日に公表されることになった。文書はさらに、高高度核実験の性質について、次のように説明している。

添付文書に示した危険水域は、高高度・高出力の爆発に伴う眼への悪影響について広範な研究を重ねた結果、設定されたものである。このタイプの実験では、放射性降下物の問題はほとんど無い。(下線は筆者による。)[★10]

このようにアメリカ政府は、高高度核実験では「放射性降下物の問題はほとんど無い」と認識していた。たしかに海上や低空で爆発した場合に比べれば、高濃度の放射性降下物に直接さらされる危険は少ないかも知れない。もしかしたらT氏とその仲

間が長寿であるのは、こうした理由により被ばくの度合いが少なかったせいかも知れない。しかし、高高度で飛び散った放射性物質は気流に乗って広がり、より広範囲にまき散らされて行ったはずである。

付近を航行する船舶に対しては、次のような警告が公示された。

船員への通知（北太平洋・ジョンストン島、危険海域）

情報：1958年7月25日付で、以下の海域をすべての船舶および乗員にとっての危険水域に指定する。この危険水域は以下の経緯度を中心とする半径400海里の円周内とする。

経度：西経169度39分53秒

緯度：北緯16度38分26秒

兵器テストの結果、この海域には深刻な危険が生じるため、船員は立ち入らないように警告する。

人命や財産に対するいかなる損害も生じないように、あらゆる対策が取られる予定である。この水域外では、そのような危険は無いと考えられる。万一、危険水域外で危険が生じるような場合には、適切な警告が発せられる。[★11]

もしかするとT氏は、高高度実験と、空中投下実験の両方に遭遇していた可能性がある。そうすると証言の一部（海が虹色になった、水平線が盛り上がった）は空中投下実験、残りの部分（眼鏡では見てはいけなかったと言われた、近づくとは言われなかった、音はしなかった）は高高度実験であったと解釈することができる。50年以上も前の話であるから、2つの経験が混同されていても無理はない。「原爆を見たのは1度だけ」と証言するT氏であるが、高高度実験は実際には空の色が変化するだけなので、「見た」とは認識していなかったかも知れない。『放射線を浴びたX年後』の中にも、亡くなった兄が「原爆を何度も見た」と自慢していたと証言する家族が登場する。マグロ漁師たちは水爆実験の全盛期に航海を続けるうち、複数回の水爆実験に遭遇していたとしても不思議はないのである。

01

02

03

04

05

64

5. 愛媛県南宇和郡愛南町での聞き取り調査

聞き取りを行ったM地区は、切り立った崖に民家が貼りつくように建ち並び、集落全体が急な石段で結ばれた特徴的な地形をしている。坂の上からは眼下の急斜面に広がるミニチュアのような家々とそれを取り囲む緑の木々、その先にきらきら光る海のある、とても美しい場所である。しかし、農地はほぼゼロで、漁港もそれほど大きくはなく、近くに海産物の市場となる大きな町も無い。マグロ漁で遠洋に出るしか現金収入を得る道は無かつただろうということが、容易に想像できる。

K氏は、1940年1月生まれの74歳、前出の宿毛市のT氏とほぼ同じ歳である。1954年に中学を卒業し、高校には行かず、父親に従ってしばらくイワシの巻き網漁を体験してから、「1956年のクリスマスにはじめてマグロ船に乗った。」「村のみんなが見送ってくれて嬉しかった」という。17歳から計30年間マグロ漁を続け、後半の18年間は甲板長を務めた。M地区からは多くの若者がマグロ漁に出たが、K氏が一番経験が長いという。

最初に乗った船はニクロ（日露漁業）の第21黒潮丸。キャッチャー（魚艇）を積んだ2800トンの船だった。1航海目で盲腸炎になりシンガポールで降ろされて手術を受けた。17歳でたった一人で外国の病院に入れられた時の心細さを、K氏は今も鮮明に覚えていた。帰りは飛行機で台湾で乗り継いだが、言葉も通じず、何時間も待たされて空腹で動けなくなっているところへ、日本語のできる台湾人が「大丈夫か」と話しかけてくれた。恥ずかしかったけれど正直に「腹が減って動けん」と言ったら、食堂に連れて行ってくれた。船の上で深刻な病気になっても操業を止めるわけには行かないので、最寄の港に降ろされるほかないのである。

K氏にお話を聞いている最中、一緒にマグロ漁船に乗っていた1歳下のいとこのH氏も、「学生さんたちが話を聞きに来ている」という噂を聞きつけて、K氏宅に駆けつけてくださった。H氏も、「大西洋、アマゾンの沖、太平洋、チリ沖～エクアド

ルなど、中学卒の時から 20 数年」マグロ漁船に乗ったベテラン漁師である。

二人は延縄漁のやり方を生き生きと説明してくれた。

針が 2 千以上ついていて、1 枚、2 枚、という数え方をする。1 枚 (240 メートル) × 450 枚 = 10,800 メートルの延縄を使う。朝 3 時に起きて、縄入れに 4 時間。えさをつけて放り込んで、見えるように旗を立てる。2.5 時間だけ寝てまた起きて、ごはんを食べて、また働く。縄を入れて 3 時間待って引き上げるが、2 ~ 3 トンぐらいなら、大体引き上げるのに 13 時間、それより重ければもっとかかる。メバチマグロやキハダマグロ、クロカワカジキなら 1 匹 400 キロぐらい、小さくても 200 キロはある。赤道直下 10 度ぐらいの場所で、3 時間弱しか寝ていないから、きつくて、みんな半分眼が開いていない。「危ないから目を覚ませ！」と何度も怒鳴られた。

お話を聞くうちに、同じ延縄漁船といっても、前出のように 2800 トン級の母船に何隻ものキャッチャー (魚艇) を積んだものと、100 ~ 500 トンの小型船では漁労方法が異なるということも分かってきた。前者では、延縄を実際に入れたり揚げたりするのはキャッチャーの乗組員であり、後者では 16 人ほどの乗組員を 8 人ずつに分けて、交代で縄入れ・縄揚げの作業を行う。上記の証言は、小型船の場合である。

巨大なマグロを引き上げる作業の大変さについて、K 氏をはじめ多くの漁師が口々に語った。H 氏によれば、「本マグロは 600 キロぐらいの重さがある」ので、魚のかかった延縄を引き上げるのは大仕事であり、「寝れん時は 1 週間ぐらい寝れん」ということである。特に「メキシコ湾の本マグロは、命懸け」だった。ある時 K 氏が「やつとのことで引き上げて解体したら、4 分の 1 の身が 130 キロあった」という。

ケガや転落事故もよく起きた。H 氏も釣り針に皮膚をひっかけて、腕などに 10 か所ぐらいの傷跡が残っているという。また K 氏によれば、サメにからむ事故も多かったようだ。「ふかひれ」は良い収入になるため、マグロ漁師はサメもよく捕った。

サメが上がったら、若いもんがわれ先に包丁持って駆け付ける。包丁の刃を

01

02

03

04

05

上にして、こうやって持つのは犯罪なんかでも罪が重くなるけど、気がはやってそう持って飛びかかる？ そしたら、サメが暴れるから自分の脚をぐさつと刺して大げがすることがあるんよ。

K氏自身は包丁による事故は経験しなかったものの、ふかひれを切り取った後のサメを捨てようとしたところ、まだ生きていたサメにおしりをたたかれ、サメもろとも海に落ちた。なかなか船からは見つけてもらえない。「手を振ってここだ〜、と叫び続けたらコック長が見つけて浮き球を投げてくれた」ので助かった。30年間に2回、転落したことがあるという。

マグロ漁師たちの仕事場は、地球規模であった。前節で述べた「基地漁業」が主流となるにつれ、積荷が満杯になると近くのマグロ冷蔵基地に積荷を降ろし、その港町に2〜3か月滞在した後、また航海に出るというパターンが定着した。K氏は、こうして30年間に「地球を8周ぐらい回った」という。マグロをよく降ろした基地は、「パナマのクリストバル、トリニダード・トバコ、カナリア諸島、アフリカの象牙海岸、ブラジルのリオやレシフェ、ベルギーのブリュッセル…」と、K氏は世界各地の港町の名前をよどみなく挙げて行った。またソロモン諸島やハワイ、メキシコ湾、インド洋のペナンでも漁をしたという。H氏によれば、マグロは当時はよく捕れて、10日もすれば船の冷凍庫が満杯になったという。チリから直接日本にマグロを持って帰ったこともあるし、大西洋で漁をした時は、ニューヨークで一度マグロを降ろすこともあった。

マグロの水揚げ先は、社会主義国か資本主義国かを問わなかったようだ。K氏は8航海目の時、キューバに何度かマグロを持って行った。「キューバでは、日本人は大事にしてもらった。キューバの人はアメリカのガムなどを欲しがったので、持って行ったら喜ばれた。」その後、パナマ運河を通して日本に帰ろうとしたら、アメリカ軍に止められて、通してもらえなかった。「2日間ぐらい魚を積んだまま足止めになった」が、交渉して最後には通してもらえた。マグロ漁は東西イデオロギーの対立とは関係がなかったが、漁師たちは否応なく冷戦に巻き込まれた。港でなんらかのトラブルに巻き込まれた時、頼りになるのが語学のできる船長だった。H氏は、「うちの船長

はすごい人だった」と、下関出身の船長について話してくれた。「あんなに世界中どここの国に行っても言葉がしゃべれる船長は珍しい。どこの港でも、ペラペラやった。」と、いかに頼りがいのある人物であったかを強調した。K氏も昔は英語やスペイン語が話せたが、今はすっかり忘れてしまったそうだ。

マグロ漁は、当時の貧しい漁村では破格の現金収入をもたらした。「あの頃はよくマグロが取れた」ので「6ヶ月の航海で300～400万円になった」と、K氏が話してくれた。妻の兄の子が中学校を出た時に一緒に連れて行つたが、「中卒で当時のお金で1ヶ月に10万円」もらえたそうだ。過酷な労働、死と隣り合わせの航海、異文化との接触、そして現金収入。こうした特殊な環境は、独特な気質や文化を形成した。例えばマグロ漁師たちは寄港地や航海からさまざまな土産品を持ち帰ることによって、東京中心の経済秩序から見れば僻地である漁村を、目に見える「モノ」を通して世界と直結させた。K氏宅では、航海から持ち帰った工芸品やワニの剥製、サメの歯など、珍しいものを手に取って見せていただいた。玄関先で飼っていた緑のオオムは、息子さんや娘さんの名前を覚えて日本語をよく喋ったという。航海から帰つたら家に近所の人たちを招いて宴会をしたが、「ジョニ黒のウィスキーのボトルを一人一人の前に一本ずつ」置いて、「飲みきつたら帰ってええで」と言った。外国製の高級時計も何本か持っていたが、時には漁の最中に海に落としたこともあった。「延縄を引き上げるときにヒョイっとロレックスが腕からはずれて飛んで行った。アッと思っただけ、もう遅いわ、海の底よ。」

また、マグロ漁師の越境的な気質を表すようなエピソードもあった。「一度、(ブラジルの) レシフェで逃げようと思った」というK氏に、筆者は愚かにも「延縄漁が辛かったからですか?」と尋ねた。「いや、違う」とK氏は答えた。

01

02

03

04

05

「日本の漁師は酒を飲むことと女と寝ることしか楽しみが無いのか」と言われて、悔しかった。たしかに外国の港に行くと、みんな踊ったり歌ったり楽しそうにしている。日本人は踊れもせん。わしは「日本人で面白くないなあ」思っ
て、それで逃げようと思った。

仕事が辛くて逃げようと思ったのかと誤解した自分の単純さに恥じ入った。マグロ漁の仕事は、どうやらナショナリティさえも揺さぶり危うくするものらしい。一步間違えばブラジル人になっていたかもしれないK氏を見ながら、マグロ漁師たちが色々な「境界線」を越えながら生きていたことに改めて気づいた。国境や東西の境界線、あるいは南北の分断線が国際政治の最大の関心事であった時代、マグロ漁師たちの越境的人生はまるで時代のアンチテーゼのようであった。

K氏とH氏への聞き取り調査は2時間以上に及び、挙句の果てに奥様から手作りの「じゃこ天」(魚のすり身を油で揚げたさつま揚げのような食べ物で愛媛県の名物)まで御馳走になった。一度食べたら忘れられないような美味しさに、学生たちも感激し、丁重に御礼を言って、次の聞き取り調査先であるO氏の家に向おうとすると、K氏は「乗りかかった船や」と、急な坂道と階段を上ってO氏宅まで案内して下さった。

O氏は、マグロの一本釣りで有名な青森県大間町の出身である。「どうしてここに住むことになったのですか？」の質問にO氏は、自分が乗船していたマグロ漁船に、たまたま愛媛県のM地区の漁師が乗っていて、航海を共にするうちに仲良くなったことを説明した。「その妹がうちの嫁さんよ。仕方ないわな……。」と、O氏は照れながら言った。マグロ漁船が縁となって青森県と愛媛県の間で人の移動が起きていたことが分かる。前出のH氏によれば、韓国や台湾のマグロ漁船とも交流があったらしい。「台湾船は仕事の割り当てが多くてかわいそうなので、港に入ったときに仕事を手伝ってあげたりした。うちらはもっと船が良かったからなあ。」マグロ漁を介して、地理的に隔たった人々の間で移動や接触があったということも、マグロ漁の重要な歴史的一側面かも知れない。

O氏の航海歴はK氏やH氏よりもやや遅く、1962年11月、22歳の時から9年10カ月ほどマグロ船に乗った。最初はインド洋への半年の航海を2回行い、途中セイロンのコロンボで給油や水揚げを行った。この時はニクロ漁業の船だったので、横須賀のニクロ漁業の基地にマグロを取めた。1900トンの本船に、17トンの魚艇を6ばい積んでいた。「魚艇に11人、艇長と機関長に、飯炊き1人」という構成員であった。朝の4時ごろから本船を中心に6ばいの魚艇が、延縄を東西南北の方向に6時間ぐ

らいかけて入れる。12時になったら、最後のほうから揚げて、本船のところへ縄を集めて持って行く。「毎日、半年間これやって日本に戻る。満船で1100トン積む。1ヶ月したら、また出かける。」という生活であった。その後は大西洋が中心となった。「パナマ経由で大西洋へ出て、それからセネガルのダカールへ行って、エサのサンマを現地の冷凍庫に保管してもらい、野菜などを調達」した。モロッコ沖のカナリア諸島にある、ラスパルマス港が基地だった。

興味深いのは、O氏のようにインド洋や大西洋を中心に航海をした漁師たちは、太平洋を中心に漁をするマグロ漁師たちよりも自分たちのほうが、より勇敢で命知らずだと認識している点であった。「太平洋では漁をしなかったのですか？」の質問にOさんは、「太平洋なんか、波がちやぶちやぶ……風ばっかり。わしらが行ったのはケープタウン沖とか、シケばっかりのところじゃ。眼の前2メートルぐらいの波で、隣の魚艇が見えんような所よ。」と誇らしげに語った。

M地区における聞き取り調査では結局、水爆実験に遭遇したり、その被害に遭ったと自覚している人には一人も出会えなかった。この地域ではニチロ漁業と提携して大西洋やインド洋に航海した漁師が多かったということも一因かも知れない。地域によって航行先に違いがあったという事実も、聞き取り調査の過程で分かってきたことだ。「水爆実験のことは聞きませんでしたか？」との問いに対してK氏は、「自分が漁に出たころには、もう水爆実験はなかった。ビキニ事件とかは自分が中学生の頃だった。」の一点張りだった。H氏も、「原爆があったときは、あれは静岡の船やった。自分は中学校のときで、聞いたことはあったが。」と答えた。O氏が初航海に出たのは、部分的核実験禁止条約が締結される直前だったが、やはり自分の頃には「もう関係なかった」という認識であった。

01
02
03
04
05
むろん、彼らが知らない・語らないことが、被ばくの事実が無かったということと同義ではない。100回以上の水爆実験で太平洋の漁場は汚染され続けていたし、南大西洋でも1958年にはケープタウン沖で「アルゴス作戦」という高高度核実験が行われていた。

ただ、水爆実験の話をしている最中にH氏がぼつんと言ったことが心にひっかかっ

た。

一度、友達が船頭やりよって、乗ってくれと言われたが乗らなかった。そして、その船が影も形もなくなった。沈んで全員死んでしまったと思う。消えてなくなった。

マグロ漁は危険と隣り合わせで、シケで沈む船も珍しくはなかったので、この船が水爆実験で沈められたと考えるのは荒唐無稽かもしれない。しかし筆者がひっかかったのは、私たちが水爆実験の話をしている最中に、H氏が突然この話を持ち出したというタイミングだった。なぜ友人の船が乗員もろとも「消えてなくなった」話を、このタイミングで思い出したのか。「自分には関係なかった」と語るマグロ漁師たちの心の中に、「もしかしたら水爆実験で沈められた（あるいは水爆実験を目撃したために沈められた）船があったのではないか」という、口にはできない不安が棲み続けているのかも知れないと思った。

6. まとめと展望

小笠原諸島の研究を通して「小さな群島の眼から近代世界を捉えなおす」試みをしてきた石原俊は、19世紀半ばからこの島に集まってきた世界各地にルーツをもつ下層水夫たちを「移動民」と呼び、彼らがいとなむ「越境的で自律的なエコノミー」が次第に国家主権の下に統合されて行く様を描き出した。マグロ漁師たちも、冷戦世界を東西や南北に分断する境界線を越境し、自律的に移動することによって生計を立てた「移動民」であったと見ることもできるかもしれない。ただし冷戦時代の「移動民」たちは、水産会社と商社という、国家主権ならぬ資本主義という権力の下に置かれていたのであるが、石原はまた、「島」が「辺境性と同時に中心性を、従属性と同時に自律性を、孤立性と同時に交通性を、閉鎖性と同時に開放性を」持っていたこと

を指摘している。マグロ漁師たちを送り出した僻地の漁村もまた、世界に向って開放されたグローバル化最前線の場所であった [★12]。

本研究はまだ緒に就いたばかりであり、今後も息の長い聞き取り調査が求められる。聞き取り調査には多大な時間を要し、授業その他の業務の合間に行うのは容易ではないが、1950年代～1960年代にマグロ漁に出ていた漁師たちは70歳代・80歳代になっており、聞き取りは急がなければならない。限られた時間の中で、何ができるだろうか。学生によるプロジェクトをどのように継続して行くか、地域の歴史をどのように掘り起こすか、またこの研究ノートで不完全ながら試みたように、聞き取り調査と公文書調査をどう融合させるか等、課題は山積している。またマグロ遠洋漁業は戦後冷戦期に最盛期を迎えたとはいえ、戦前日本の「南洋」統治の歴史と切り離すことはできない。さらに第二次大戦を契機として、これらの地域がアメリカの施政権の下に置かれて行く過程もまた、無関係ではありえない。こうした歴史についても、最新の先行研究 [★13] をふまえて目配りして行く必要がある。

そして究極的な目標はやはり、冷戦史をより重層的に描き出すことによって、その延長線上にある現代世界についての洞察を深めることであろう。冷戦史の「中心」や高度経済成長の「中心」からはずれた辺境地域で、同時代にどのような歴史が展開していたのかを明るみに出し、その中にマグロ漁という産業・文化と、マグロ漁師の被ばくという問題を位置付けて行く。そうすることによって、グローバルとローカルをつなぐ「グローバル冷戦史」に小さいながら一步を踏み出すこと出来れば、冷戦の海と格闘してきた漁師たちの生と死を、被ばくの問題を含めて、しかしそれだけに収束せず、世の中に問いかけることができるのではないかと考える。

01

最後に、聞き取り調査にご協力下さった元マグロ漁師とその家族の方々に心から御礼を申し上げます。

02

03

[本研究の一部は、JSPS 科研費 24510349 の助成を受けたものです。]

04

05

■注

- ★1——聞き取り調査プロジェクトへの参加学生は、3回生の粟村亮、石川佳那美、佐々木颯、中村菜月、西江一恵、三上真結、4回生の津吉利明、西垣真、および卒業生の近藤南である。
- ★2——『放射線を浴びたX年後』公式ウェブサイト、<http://x311.info/>
- ★3——映画『放射線を浴びたX年後』南海放送、2012年、伊東英朗監督作品。
- ★4——若林良和『カツオの産業と文化』（成山堂書店、2004年、2007年3版発行）、51-52頁。
- ★5——齋藤健次『まぐろ土佐船』（小学館文庫、2003年、第二刷2013年）、89頁。
- ★6——Elaine Tyler May, *Homeward Bound: American Families in the Cold War Era* (Basic Books, 2008. 初版は1988年); ロバート・ジェイコブズ著、高橋博子監訳『ドラゴン・テール——核の安全神話とアメリカの大衆文化』（凱風社、2013年）
- ★7——Department of State, Memorandum of Conversation, July 6, 1954, National Security Archives, the Nuclear Vault, doc 12.
- ★8——ニチレイウェブサイト <http://www.nichirei.co.jp/>; 株式会社ニチレイ（編）『ニチレイ50年史』、1996年、97-98, 132, 169, 194頁。
- ★9——The Nuclear Weapon Archive, <http://nuclearweaponarchive.org/>（2014年6月6日閲覧）
- ★10——From Louis Straus to Carl T. Durham, June 25, 1958, RG326, Entry UD-UP 10, box 4, 米国立公文書館（メリーランド州カレッジパーク）。
- ★11——“Proposed Notice to Mariners,” RG326, Entry UD-UP 10, box 4, 米国立公文書館。
- ★12——石原俊『〈群島〉の歴史社会学——小笠原章頭・硫黄島、日本・アメリカ、そして太平洋世界』（弘文堂、2013年）、9, 29, 184-186頁。
- ★13——日本の「南洋」統治については例えば、浅野豊美編『南洋群島と帝国・国際秩序』（中京大学社会科学研究所、2007年）、第二次大戦中～戦後のアメリカによる施政については、池上大祐『アメリカの太平洋戦略と国際信託統治』（法律文化社、2014年）、また特にマーシャル諸島については、中原聖乃・竹峰誠一郎編著『核時代のマーシャル諸島——社会・文化・歴史、そしてヒバクシャ』増訂新版（凱風社、2013年）などが挙げられる。